日の文明の程度に於ては、どんな天才でも合衆的勞作に劣るのである。即ち、天才は一人で出來たものでは無い。彼は全く産業的進化の産んだものである。それで産業世界に於いては相互扶助は唱へられ得るが、産業專制は主張し難いのである。即ち、今日の分業の世の中では、どうしても、産業は民主的になるより外に道は無いのである。

第十四章　經濟病理より見たる主觀經濟

崇物症の經濟病理と唯物史觀

唯物史觀の發生

人間の社會に於て成長と愛はよろこびであり藝術である。それが、唯物的に固結した時にその成長は止り、甲殼類がキチン質を蒙つたように、融通のきかぬものと成つてしまうのである。之は人間の經濟生活に於ても最も著しくその例を見るものである。

戀愛の變質したものに、崇物症（Fetishism）と云ふものがある。之は戀人が戀しい餘りに、彼女或は彼から貰つたハンカチ、寫眞、指輪、凡てが、崇拜の的となるのである。それでもしも戀人の表象となつて居るハンカチか何かを奪れることでもあれば、それは直に彼を絶望の淵に陷れその爲めに或は自殺することもあれば、他人を傷つけることもあるのである。之は人間性を忘れて戀愛が表象物質に移つたものを今度はその人間を忘れて、物質のみ愛する爲めに起る感覺上の錯覺である。

之は宗教上にもあることである。野蠻人は物質の中に生命ありとしてフエチシュなるものを作つて之を禮拜する。即ち彼は無生の物質を生命あるものとして禮拜するのである。然し之は稍高尙な偶像教と儀式中心の基督教にも佛教にもある。即ち宗教の本質が敬虔と愛と生命にある可き筈であるに、その敬虔と愛と生命の表象となつて居るものが表象の殼となつて形成される爲めに、今度は信仰の凡てがその中に沈澱して融通が取れぬものとなるのである。之が即ち宗教上の崇物症（Fetishism）である。そしてこの宗教及戀愛に發見せられる崇物症は經濟意志の上に於ても發見せられるのである。私は之に就てマルクスはよく説明して居ることを思ふ。マルクスも之を經濟上に於ける崇物主義と云ふて居るが、それを歴史哲學的に見たのがマルクスの唯物史觀である。

マルクスの資本論の中で、この點に關して最も面白く解説してくれてあるのはその第一卷「商品の拜物教的性格及び其祕密」（生田長江氏譯七三——九二頁參照）である。そこに彼は如何に巧妙に商品が勞力によつて生産されるものであるかを説明して居るのである。所が今日では、その勞力を崇拜することを忘れて、物貨だけを崇拜するのである。そこに錯覺が起るのである。殊に之が貨幣及紙幣のようなものになると一層それに對する錯覺の度が強くなつて、貨幣の基礎

である社會經濟的信用組織と云ふものを無視して、たゞ金と云ふようなものに意識が集中して發狂的に幻覺を生じるのである。

之を圖解すれば次の樣なものである。

私は今假りに三つの斷層EBの世界FBの世界、又FSの世界がある。そしてEBの世界に於て時間的推移をする我なるものがBFの世界なる肉體に作用して、更に之が勞働となつてFSの世界に一波瀾を起したとする。之は慥に心の世界が客觀に作用したものであるから、その線の進行の方向を私は自我の表象運動即ち私は之を唯心史觀と云ふもので呼んで居る。

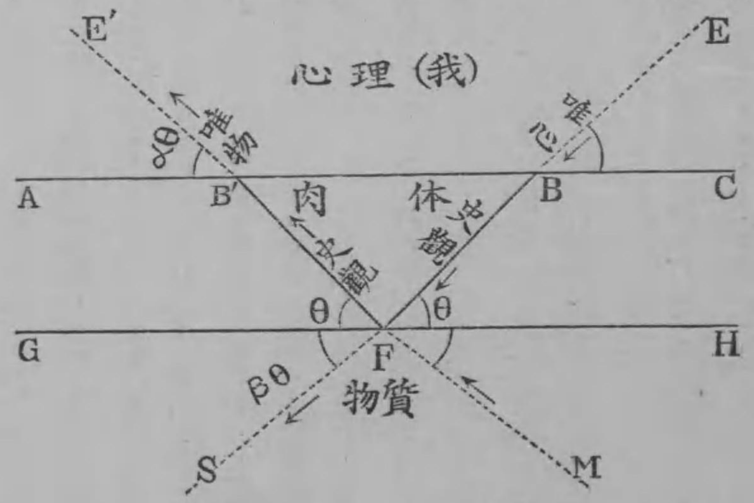

Fig. T.

E＝（我 Ego）
B＝（肉體的勞力 Body）
F＝（崇物容體 Fetish）
S＝（表象 Symbol）
M＝（物質 Matter）
B′＝（肉體的補給）
E′＝（假象我）

θ＝（表象に必要ある函數）
β＝（心理生活が肉體及物質に作用する函數）
α＝（物質及肉體が心理生活に作用する函數）

處が、EBFへの方向の運動がFに達した時に、Fに於ける反射作用が、角BFHと同角をなしてEB′の方向に屈折するとする。即ちFに於ける物質及物質化の勢力が肉體に作用して、心理生活のE′にまで延びるとする。この場合に於て、E′の實在と云ふものは、Eの反射したものであるけれども、それが、Fの點に於て反射した一種の寫映なる事に於て、Fの系統に屬するものであるかのように見えるものである。之はM（物貨）から來る感化と一緒になつて見えるので、此處に唯物史觀が成立するのである。そこで私が主張して居る唯心史觀關係が之れでよくわかると思ふ。唯物史觀は、唯心史觀の一部——即ち意志行爲が、崇物化し、唯物化する反射作用を説明したものであつて、FB′E′の間の運動のみを見るならば、唯物史觀は眞理である。

處が近代になつて、機械が大なる發達を遂げると共にE（我）の表象運動が盛になりFに於ける錯覺が起つて、Fの上に凡ての文化が乘つて居るかの如く考へられたのである。此處にマルクスが勞力價値説即ち唯心史觀から出發して、彼自らまでが、唯物史觀説のみを以つて歴史の全部だと考へるようになつた理由である。

然し之は先にも述べた樣に、歴史上に於ける反射作用の説明にはなるが、「我」の成長即ちEBFSへの方向及EBFB′E′の反射運動全部の説明にはならないのである。

そして唯物史觀そのものが、既に崇物症を時間的に歴史的に説明したものであるから、マルクスがたゞ之を以つて、勞力の解放を説くならば、當を得たものと云ふことが出來ぬ。

然し今日に於ける崇物主義の迷霧が餘りに深いものであるから、マルクスの云ふ唯物史觀が不幸にして今日の多くの生活を支配して居るのである。之を私は社會經濟生活に於ける第一の疾患であるとするのである。そしてこの疾患の影響せる所は政治、宗教、學問、道德の墮落であり、その硬結化である。

唯物史觀の眞理

自我分裂と經濟史觀

然し考へ無くてならぬことは、この圖表に於て明示してある如く、唯物史觀的運動も、唯心史觀的運動も全く「我」の運動が分裂したものであつて、本源に於ては決して二つのもので無いと云ふことである。

それで、私は此處に於て、唯物史觀の眞理を充分認める。そしてこの唯物史觀の上に建設されて居るマルクスの資本主義否定の原理をも充分認める。それは凡て眞理である。局部的の眞理である。たゞそれが全局的に見て、自我の全部の運動で無いと云ふことゝ、唯物史觀は假象我の分裂自

我の運動――云ひ換れば、唯物史觀そのものが發生するのが既に經濟的に、社會的に病氣に取りつかれて居るものであると云ふことを認識すればそれで善いのである。

それで、唯物史觀の方向から回轉して自我と生命と、勞働の世界に取り返すのが眞の內的革命である。それをマルクスの云ふ通りに一局部のみを以て全部の自我運動を蔽ふて了ふことは間違つて居る。もしもマルクスの云ふ通りであれば、我の確立も、生命權の回復も出來ない筈である。そこをマルクスは、知らず知らずの間に、自我を肯定して居るものだから、あんな大膽な言說が吐けたのである。

それで誤解の無い爲めに、私は繰返して私の唯心史觀なるものと、唯物史觀との關係とを明示して置きたい。

私は唯物史觀の眞理を肯定し之を全部認める。然しそれは哲學的の意味に於てゞは無くして經濟的の意味に於てゞある。唯物史觀は『我』から發生した、形象の錯覺から迷ふて行つた方向に囚れた歷史であるから、眞理の全部で無い。それは知らず知らず『我』を運んで居る。そしてその中の我は『假象我』となつて居る。

唯物史觀と唯心史觀とは決して逆のものでは無い。同一質の部分的差である。卽ち唯物史觀

は唯心史觀の一部分である。唯心史觀の迷ひの歷史が唯物史觀である。『我』が崇物症に囚へられたものが、唯物的に發展したからと云つて『我』の一部分で無い理由は無い。つまり私に云はせるなら、㊀經濟史觀は『我』と『人間』の經濟史觀である以上、到底『我』から離說することが出來ないのである。たゞ『我』が『客觀』の力と『物質』の力に敗けて了ふか、それとも『我』が『客觀』と『物質』の力に打勝つかと云ふ所に、經濟史觀に『崇物的經濟史觀』卽ち唯物史觀と云ふ名を蒙せるか、或は『崇勞働的經濟史觀』と云ふ名を蒙せるかの區別が起るのである。

然し此處に特に注意す可きは、マルクスの云ふ生產の形式の上に凡ての文化が載つて居ると云ふその生產の形式であるが……その生產の形式と云ふものも究竟的に云へば『我』が、客觀界の物質と相交涉して、その時代時代に決定して行くものである。特に機械の發明、動力の使用などになれば、それは、自我の趨異の形式であつて、自己が客觀界に吹きかけた生產の形式そのものである。つまり、もし今日機械文明で、人間が縛られて居るとするならば、それは、自己が脫がんとする皮殼で、自己が縛られて居ると云ふことである。それで、唯物史觀的生產の形式と云ふのも私から云せば、飽迄、唯意志經濟史的發展の一局部にしか過ぎ無いと主張したいものである。

以上は經濟史的に唯物史觀を見た場合であるが、哲學的に見る場合には私のやうに見ずして、

哲學史觀と經濟史觀の相違

物質と肉體から出發せんとするのである。即ちM（物質）から出發して、肉體となり、心理生活に至る方向が唯物史觀であるとする。之は然し生産の形式は初めから否定して居るものである。即ち物質が精神を作ると考へて、生産の形式とは要するに、物質が自己決定したものであると云ふことになる。つまり、物質が自我の内容を全部決定すると云ふ一元論になる。

更に一歩進めて云へば『物質は自我を内容とする』と云ふことになる。そしてその結論は物質は自我を持つと云ふことになる。たゞ、物質が先にあつて、自我が後に出てくると云ふだけの差である。それで物質が常に先にあつて自我が常に後にあるとすれば、自我は物質を決定せずして、物質のみが自我を決定することになる。そして之を唯物史觀と云ふならば、自我はいつでも、物質的實生活の反影となるわけである。で、こんな窮屈な見方をすれば、物質と自我とは全く區別の無いもので、物質は物質だと云つた方が早いのである。何も物質だ、精神だと區別し無くても善いのである。生物化學の方程式で自我生活の心理作用が全部解決し得る筈であるのだ。勿論之に認識論的批判などがある筈が無い。唯物史觀論者に云はせば、認識論的批判など云ふのが既に囈語であると云ふに相違ないのである。かうなれば、物質の歴史そのものが經濟史となるわ

けである。所が物質の歴史と云ふのは、マルクスなどによると自我に到達するまでの歴史であらうが、不幸にしてこの物質はその自身に變轉を知つて居て、第一の物質と第二の物質即ち唯物的物質と、唯心的物質（そんな言葉があり得るとすれば）の間に多少の差違を發見するのである。然しその間にまた共通した物質的要素を發見せんとするのである。

變轉はマルクス史觀に於てはそんなに不思議な効力を持つて居るのである。即ち變轉の力は何處から來たものであらう？　同一質を他質物に變造し、無より有の實在的創造をなし得る變轉は何んであるか？　少なくも、第一の境遇より第二の境遇を産み得る變轉の力は何者であるか？マルクスはこの根本的の問題を全く無視して居るのである。即ち初めの物質が、後の自我となる創造力を無視して居るのである。

マルクスは之を變轉と云つて誤魔化して了ふ。然し私にはこの變轉そのものが問題である。この變轉の本質が明瞭にならなければ歴史を論ずるに足らぬと思ふのである。そして私は物質そのものよりも　また精神と云ふ狀態そのものよりか、この變轉そのものゝ境地を哲學的に大事だと思ふから、私は唯物史觀になれないのである。史がつく以上、變轉が附加される以上、それは物を改造する力である。それをエネルギーと云ふ人があるかも知れぬ。エネルギーは然し變轉その

ものでは無い。私はこの變轉そのものゝ全能力を私の哲學の基礎に置くのである。それは進化の力である。それは意志そのものである。つまり、エネルギーと云ふ抽象的なものでは無くして我が體得して居る意志そのものである。創造の力である。進化の力である。それで唯物史觀と云つても、唯物を變轉せしめる力の經過と見る時にそれは物質以上のものであると考へられるのである。それは意志である。この意志の變轉力を直覺する私は、どうしても物質が先にあつて、心理生活が後にあるとは考へられ無い。先づ變轉の宇宙意志が先にあつて、それから物質と云ひ、心理生活と云つたようなものがあると考へるのである。それは私には與へられた a priori である。

そこで　毎度繰返すように、私のこの變轉そのものゝ經過史を唯心史觀と云ふのは無理であるが、言葉が無いから唯變轉史觀を唯意志史觀とも云ひ、この進化の潮流が人間の經濟意志となり、經濟史的生活となる時に私は之を唯心的經濟史觀と云ふて居るのである。

即ち、私は進化論を私の哲學―(認識論、歴史哲學)―の基礎にするから、マルクスのやうに價値の進化が意志的に來るものであると信じ無いものとは行き方を異にするようになるのである。

然し私に云はせば、マルクスなどはこゝに私の述べて來たような、物質が自我内容を持つような唯物哲學的經濟史觀と、私が崇物症から説明した唯物的經濟史觀とを全く混同して居るのであつ

て、私は哲學的唯物史觀ならばどうしても信ずることか出來ないが、經濟的崇物症から來た唯物史觀であるならば、私の唯心的經濟史觀の一部分として信ずることが出來るのである。

勿論私は物質が心理生活と全く關係が無いと云ふものでは無い。宇宙意志から云ふならば、物質はその意志の或形式であらう。電氣物質觀の成立して居る今日であるから、電氣が物質で無い以上、そして物質とは電氣で出來て居るものであるから、我等が物質として固定的に見て居るのは我等の官感の不完全性から來て居るのであつて、官感の印象的經濟が、我等を唯物的にまた崇物的にならしめる理由であらうと思はれる。それで我等は物質を食ふて生きて居るのでは無い、或宇宙意志の生活條件を充分に充足して居る或形式の下に生きて居るのである。それでその生活條件の或交渉の下に成立する物質として表現して居るものと、心理生活として表現して居るものゝ相待的關係函數は充分認めるのである。之が即ち經濟そのものである。

そして、我の成長と共に――即ち自我意志の成長と共に、物質によつて育てられたるものが今度は物質を衣裳の如く自我の中に鑄改へて、表象とし、藝術として見るようになることによつて、經濟生活は即ち自我運動となり充分唯心運動となるのである。

即ち經濟運動は、唯心運動への運動であり、更にまた唯心的になり、藝術的になつたものが、

必ず歸つて來ねばならぬ舞臺である。即ち經濟史觀はどうしても唯心的であらねばならぬ。そして、それが唯物的である場合はそれが、心理的に崇物症に捕へられた時であるのだ。

不勞所得の病理と唯物史觀

金儲の心理的解剖

崇物症から出た硬化症は、物質を多く所有したいと云ふ欲望に變る。そして、努めて多く持たんとする本能となつて現れる。それを金儲けの心理と云ふ。それは努めて多く勞働しようとはせずして、努めて多く集積するのである。この病理は色々な原因から起つて居るが、その根柢に於ては崇物症痴呆からである。

然らば如何にして集積し得るかと云へば之は主として癌種の如く、他の營養を攝取して成長するものである。即ちこれは一面に於ては不勞所得によらざれば集積しないのである。そして不勞所得を最も吸收しようと思へば消化機關と血行機關に喰ひつくのが最も早いのである。それで今日世界の資本主義の集積なるものは凡て經濟組織の血行機關即ち交換作用と消化機關即ち勞力と人口の上に喰ひ付いた癌種でないものはない。もしも自己の勞力によつて足る自足經濟の世界で、集積した所でそれは少しも今日行はれて居るような巨大な富の集積にはならない。然し他人

の勞力と、增加し行く人々を基礎にして、集積的攝取を試みんとするならば實に易々たるものである。資本主義の來ない前に資本の集積は大名であり將軍であつた。彼は他人を奴隷として使用し其勞力を略取した。又彼は土地より年貢米を取り立てた。そして今日の資本家は其の大名や將軍と同じことを違つた形式でやつて居るのである。即ち凡て社會經濟の動力ともなる可きものには凡てに轡をかけてその成長より徐々に不勞所得を搾取するのが今日の資本主義經濟である。そしてその成長力の最も多く搾取出來るものは工場と土地である。それで、工場と土地に生く蟲が今日最も多いのである。

然し今日金儲けと稱するものは、多く工場と土地による成長力より搾力する利子及地代の外に、交換作用より搾取するものが多いのである。

交換作用の搾取は、商品の市價の差違より發生する餘剩價値の略奪である。即ち一錢の價値しか無いものを十錢に賣付けた場合に九錢の金儲をしたと云ふて居るが、社會的に云へば、それは何の價値の發生にもなつて居らぬので、十錢の價値を不平等に分配したことに外ならないのである。然し今日の社會組織はこの不完全な交換作用を是認して、不當なる所得のあるものを尊敬するものであるから益々墮落するばかりである。

處が今日、この交換作用が最も多く行はれ、市價を人意的に製造する所は大きな都會の市場である。市場は國民の需要供給の量を知る爲めに是非とも無くてはならないのである。然るにこの市場なるものが、社會組織の安全の爲めに出來て居るならばそれによつて集積的搾取は行はれ無いのであるが、今日の市場には私人の跋扈を自由に許してある爲めに此處に人爲的に投機なるものが行はれ、市價の吊上げが企てられるのである。市場があるばかりに財が集中する傾向があるにその上更に人爲的に買占めでも行ふならば資本の集積は何の苦もなく出來るのである。面白いのは、市場の進化と共に、工場、土地が賣物に出るので、此處に近世市場には十八世紀及十九世紀の前半に多く見無かつた、株式市場なるものが現れ、工場そのものまで一枚の紙に表象されて賣買され、その交換價値の差額によつて不勞所得を利せんとするものが起つて來たのである。

圖に示したものは不勞所得の發生によつて如何に資本が集積するかを圖解したものである。最初資本家と銀行の手を離れて金が放資されると、直に發生するものは利子と利潤と地代である。そして工場に於ては勞力より餘剩價値の發生がある。勞働者の賃銀は預金として資本の方へ集中する。然らざるものは日用品市場へ消費されるそこでは資本家が投資して居る市場がまた其勞働者の賃銀によつて利するのである。それは先に述べたやうに市場の社會化が無い爲めに市場を利有し獨占し、投機的に不勞所得を增加せしめることを計るのである。それで、實際富を生産する勞働者は、細い筋で現されて居るやうに、實に哀れな生活を續けて居るのである。然るに、資本主義の方では、資本の流通が多ければ多い程その不勞所得を多くするのである。それで勞働者は貧民とならないにしても資本の集積する富に比較して益々貧乏となるのである。そして此處に金力差別による階級が發生するのである。そこでもしもこの不勞所得を絕滅せんとするならばそれは、流通機關の凡てを社會化するより外に道は無いのである。

主觀經濟の立場

即ちこの資本集積的不勞所得の發生した根本動機は、崇物的に交換價値を決定したことに始る

のである。もしも、工場の生産能率そのものを表白するに一枚の株券でしないならば、不勞所得即ち金儲けなるものは發生し無いのである。

唯物史觀の脫却

即ち今日の凡ての經濟組織が不勞所得の上に——而もそれが物質的に換算された貨幣の上に載せられてある爲めに、今日に於ては、凡ての生活が唯物史觀的に出來て居ると云つても差支へは無いのである。

それで我等がこの唯物史觀的迷路を立ち切り、主觀性を忘却した、金儲けのみを基礎として、敎育を賣り、宗敎を賣り、藝術を賣り、自我そのものまでも、金儲けの爲めに賣り渡すその矛盾を破壞して、眞に自我の出生を贏ち得る方向に導くことが主觀經濟の任務である。この意味に於て、今日の資本主義經濟は、經濟病理の上に發生した唯物史觀で充分解釋出來るのである。然し我等は更に、唯物史觀の世界を嚙み破つて、自我の支配する世界に飛び出さねばならぬ。主觀經濟はそこから產れるのである。それでもしも今日、唯物史觀より發生した社會經濟の病理を救濟せんとするならば、この後いくら、資本主義の經濟を多く附加しても駄目である。今日のやうに價値生活が分裂して居ては駄目である。凡ての價値……それは或ものは、宗敎的に、藝術的に、敎育的に、科學的に現れて居るもの……を凡て統一して今日まで主觀價値から出發する人々から

穢れて居ると輕蔑せられて居た經濟價値を統一して了ふことである。即ち主觀性の中に凡ての價値を含めて了ふことによつて　今日までの分裂的價値が初めて統一せられるのである。

そこで價値の體系なるものが論議せらるのである。そしてどの價値が最も高尙であつて、どの價値が最も下等であるかと論ぜられる。今日までは神と寶に兼ね仕ふること能はずと敎へられて、經濟價値は宗敎價値に比較して下等なものであると考へられて來たのである。

然し之は、主觀性の成長し無い時のことであつて、今日のやうに主觀性が經濟價値を充分征服し得る見込が立ち、崇物主義から唯生命主義に復活し得る場合には、經濟價値は却つて宗敎價値の一部分として尊まれ得るやうになつたのである。即ち分裂的自己の時に於ては價値の高下が有り得るが、統一自我に取つては凡てが平等の價値を持つて居ることになつて居るのである。否更に凡ての價値が經濟價値によつて表白されんとする表象的運動に向ふ時には、經濟價値は價値の一形式になり得るのである。然しこの價値の體系と高下の問題は主觀性の成長と共に變化するものであつて、主觀性が灼熱的に凡ての價値を熔かし込むときに經濟價値が、神と決して背馳せず寧ろ主觀性の表現に使用せられるやうになるのである。之が藝術である。

かく主觀經濟の確立と共に、今日までの凡ての經濟病理は修復を見る。それで、今日の分裂せ

る價値を纏め、眞の自我として生くる爲めにはどうしても、主觀經濟によるより外に道は無いのである。

主觀經濟の原理了

大正九年六月十九日印刷
大正九年六月廿二日發行

□定價五圓□

◆不許複製◆

主觀經濟の原理

著作者　賀川豐彦
發行者　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永一良
印刷者　東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地　佐藤保太郎

〔本製神福〕

版元　東京市京橋區尾張町二丁目十五番地　福永書店
振替口座東京四〇四六六番
電話番號銀座一六九九番

徳富健次郎著

新春

◆第六十版

三六判綾金裝羽二重表紙
四百六十頁 天金 箱入
定價 二圓三十錢
送料 十五錢
特撮寫眞版五葉
著者スケッチ色刷二葉

沖野岩三郎著

文壇十一名家の感想批評を添ふ

煉瓦の雨

◆第五版

富本憲吉裝畫
四六判ポイント三五六頁
表紙 木版 手摺 箱入
定價 一圓六十錢
送料 十七錢

沖野岩三郎著

「大阪朝日」懸賞當選

宿命

◆第五版

富本憲吉裝畫
伊上凡骨彫刻
四六判ポイント五一一頁
布裝 天金製 箱入
定價 二圓八十錢
送料 廿一錢

382
109

終